「夏の花」教材研究ノート

――虚構性を中心に――

脇　康治

一

原民喜は、原爆被災時のノートに、「我ハ奇蹟的ニ無傷ナリシモコハ今後生キノビテコノ有様ヲツタヘヨト天ノ命ナランカ」と記している。

そして、小説「夏の花」を、罹災直後の秋から冬にかけ、「ひどい衰弱と飢餓のなかで」「ひだるい軀を石油箱の机に鞭打ちながら」「原子爆弾」と題して執筆したという。

また、後に、次のようにも書いている。

「原子爆弾の惨劇のなかに生き残った私は、その時から私も、私の文学も、何ものかに激しく弾き出された。この眼で視た生々しい光景こそは死んでも描きとめておきたかった。『夏の花』『廃墟から』など一聯の作品で私はあの稀有の体験を記録した。」（「死と愛と孤独」）

「戦争は終ったのだといふ感動が、それから間もなく僕に『夏の花』を書かせた。あのやうに大きな事柄に直面すると、人間のもつ興奮や誇張感は一応静かに吹き飛ばされるやうである。僕は自分が体験した八月六日の生々しい惨劇を、それがまだ歪まないうちに、出来るだけ平静に描いたつもりである。」（「長崎の鐘」）

ここには、作品の動機、執筆時の状況、執筆態度・方法等が明確に示されている。

しかし、誤解してはならないのは、彼が見たであろう現実を、ただ忠実に再現しただけの記録ではないということである。

もちろん、「原爆被災時のノート」に基づきながら書かれたであろうし、内容も、それとほぼ一致している点から考えると、できるだけ、事実をありのままに描こうと努めたであろうことは容易に想像できる。

しかし、小説として完成しようとする彼には、作家としての創作意識が働いており、かならずしも、「ノート」そのままを拡充しただけのものとはなっていないのである。

すなわち、事実を描いているであろう「ノート」と対比してみると、小説「夏の花」には、文学的に再構成しようとする虚構性が明らかにみられるのである。

この虚構性を明らかにすることによって、「夏の花」が文学作品として成り立っているありようを知ることができる。

そこで、この文章では、構成面、表現面を中心に、「夏の花」の虚構性について考えてみたい。

二

まず、構成面にみられる虚構性について考えてみる。小説「夏の花」と「原爆被災時のノート」の構成を比較すると次のようになっている。

夏の花	原爆被災時のノート
Ⅰ 序（墓参り）	※
Ⅱ 事件（被爆）	
1 事件（被爆）	○被爆
2 妹	○家の様子
3 工場の人	○恭子
4 家の様子	○着物
5 着物	○達野
6 事務室のK	○江崎
7 持逃げ用のカバン	○持逃げのカバン
8 大きな楓	○倒れた楓
↓思い出	※
Ⅲ 避難	
1 栄橋へ	○栄橋へ
2 泉邸のやぶへ	○泉邸の竹やぶ
3 学徒との出合い	○学徒との出会い
4 長兄との出合い	○長兄との出会い
5 自己認識	※（Ⅵに出る）
Ⅳ 被爆後の街と人々	○向岸の火
1 対岸の火事	※
2 兄妹の被爆時の様子	○玉ねぎの函
3 玉ねぎと救助	○龍巻
4 龍巻	※
5 次兄との出会い	○惨たる風景
6 言語に絶する人々	○向岸に渡る
7 向岸の人々	○柳町のねえやと桜（赤ん坊）
8 次兄の家の女中	○川土手の夜
9 川土手の夜	※
10 幼時の思い出	
Ⅴ 被爆翌日の様子	
1 東練兵場の施療所	○東練兵場の施療所
2 姪との出会い	○華との出会い
3 施療所の様子	○施療所の様子
4 憩いの場所	○憩いの場所
5 東照宮境内の人々	○東照宮境内の人々
Ⅵ 被爆翌々日の様子	※○広島駅方面の様子
1 女子商業の生徒・モンペの婦人の死	○黒焦げの婦人・学徒の死
2 ラッパの吹奏	○ラッパの吹奏
3 長兄と馬車	※○自己認識―天命を知る ○長兄と馬車

Ⅶ 八幡村へ①
　。甥文彦の死体
Ⅷ 八幡村へ②
　1 焼跡の様子
　　↓片仮名の詩
　2 八幡村
Ⅸ 結び
　1 中学生の甥
　2 Nの話

　。甥文彦の死骸
　。市街の焼跡の様子
※
　。草津から八幡村へ
※
　。その後の見聞
　。今本の話

※印は異同のある部分

この両者の異同のある部分について、四種に分類して考察してみる。

㈠　追加

ノートは要点だけを記しているのであるから、それをもとに小説化される場合、表現が補足拡充されていくのは当然であるが、意図的に追加されたと考えられる部分がいくつかある。

まず、序の墓参りの部分である。小説の冒頭にふさわしく追加されている。結末部分のNの話と見事に呼応していて、この小説全体を妻への祈りで貫いているようである。

墓に供える「黄色の小弁の可憐な野趣を帯び」た花は、題名に通じる「夏の花」であり、「井戸で水を呑んだ」ことや「線香の匂がしみこんでゐた」ことは、次に起きる悲惨な事件の暗示、伏線ともなっている。

次に回想の部分である。

一つは、避難する際に、倒れた楓の側を踏み越えて行く部分の回想表現である。

「私の少年時代、夢想の対象となってゐた樹木」が無惨にも折れ曲がったことを述べるとともに、この春以来、「郷里全体が、やわらかい自然の調子を喪って、何か残酷な無機物の集合のやうに感じられ」、「『アッシャ家の崩壊』という言葉がひとりでに浮んでいた」と述べることによって、被爆というできごとを予感させ、作品にリアリティーを持たせる働きをしている。

二つは、長兄・次兄・妹の被爆直後の様子を述べた部分である。これは被爆時のさまざまな状況を明らかにするために加えられている。

三つは、京橋川の川土手で一夜を過ごす場面の、幼時の回想部分である。

「幼い日、私はこの堤を通って、その河原に魚を獲りに来たことがある。（中略）夢のやうに平和な景色があったものだ。」

地獄絵巻を思わせる現実と、平和な幼時とを対比することによって、現実の悲惨さを強調している。

次に片仮名書きの詩の部分である。

八幡村へ向かう途中、国泰寺、住吉橋を越して己斐の方へ出るまでの、市街地の情景が描かれている部分で、「この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方が応はしいやうだ」として、後に「原爆小景」として発表された詩の中の、「ギラギラノ破片ヤ」という詩が挿入され、異様な情景を効果的に表現している。

次に中学生の甥が帰って来た部分である。

被爆翌々日の様子を述べたところに、「次兄の家の長男と末の息子は、二人とも市内の学校へ行ってゐたので、まだ、どうなってゐるかわからないのであった」とあるのを受けた部分である。

九死に一生を得た事情を描くとともに、原爆症ともたたかいながら生き抜いていく姿を描いている。

なお、この部分については、読者からきまったように「あの甥はどうなりましたか」とたずねられるので、「どうもあのところは書き足りないのではなかったかと思へる」として、後に「星のわなな き」という作品に書き添えている。（甥のモデル、原邦彦氏は、三十余年後の現在、広島国泰寺高校に建つ追憶之碑に名を連ね、旧広島一中の原爆に散った友達とともに眠っている。）

最後に二つの部分を指摘しておきたい。

一つは、Ⅱの4、家の様子を述べた部分である。四十年前に神経質な父の建てさせた家が、しっかりした普請だったので倒れなかったことを述べている。このことについては、「原爆回想」の冒頭にも詳しく書いている。

二つは、Ⅳの3、玉ねぎと救助について述べた部分である。少女を救助したことについて、「ノート」には何も書いていない。書かれてもよさそうなエピソードでありながら、書かれていないので、追加された虚構の部分としてあげておきたい。

㈡　入れ替え

「我ハ奇蹟的ニ無傷ナリシモ　コハ今後生キノビテコノ有様ヲツタヘヨト天ノ命ナランカ」と、「ノート」に記しているのは、被爆翌々日の、かなり落ち着いた場面においてである。

しかし、小説では、その場面にはなく、Ⅲの5、自己認識の部分に記されている。

川岸に避難して、「もう大丈夫だという気持がした」ときに移してある。小説として、最も適切なところに入れ替えられているわけである。

「長い間脅かされていたものが、遂に来たるべきものが、来たのだった」という表現がつけ加えられ、作者の感じ続けてきた死の予感、日本軍による香港入城式の録音放送を聴いて以来、身近に迫ると予感されていた「もっともっと怖しいこと」、予想されていた空襲などが、現実のものとなったことが述べられる。

これは、原爆というできごとの必然性を感じさせ、作品にリアリティーを持たせる効果もある。

さて、そのあとで、「かねて、二つに一つは助からないかもしれないと思ってゐたのだが、今、ふと己れが生きてゐることと、その意味が、はっと私を弾いた。このことを書きのこさねばならない、と、私は心に呟い」て、作家としての「私」は、使命感を感じ取るのである。

㈢　整理

Ⅴの5、東照宮境内の人々の部分の話題は、「ノート」によると、傷つける男、安藤、三四郎、負傷者、女子商業の生徒、黒焦げの婦人、幹部候補生、ふん尿・蝿、東照宮の欄間、燈籠の石である。

しかし、小説では整理されて、隣の男、幹部候補生、女子商業の

学徒、モンペ姿の婦人だけとなっている。

話題を精選して、印象的に描いているのである。

Ⅵの被爆翌々日の様子を述べている部分の話題は、「ノート」によると、広島駅方面の様子、黒焦げの婦人の死、学徒の死、念仏の声、ラッパ、安藤のにぎりめし、自己認識（天命を知る）、罹災証明、空襲警報・爆音、オートミール、長兄と馬車である。

それが、小説では、念仏の声、女子商の生徒の死、モンペ姿の婦人の死、空襲警報・爆音、次兄の家の長男と末の息子、あたりの様子、ラッパ、姪・女中、長兄と馬となっている。

ここでも、話題が整理され、前後のつながりも配慮されて、印象的に描かれている。

㈣　再構成

結びのNの話の部分は、「ノート」の「その後の見聞」「今本の話」を中心に再構成されている。

Nの話の中心をなすのは、「ノート」にある、「今本ハ女房ノ死体ヲ探スノニ何百人ノ女ノ打伏セニナレルヲ起シテ首実検ヲシタガ腕時計ヲシテキル女ハ一人モナカッタト云フ」の部分である。

その部分を、Nが妻の姿を屍の街に捜し求める話としてふくらませ、「ノート」にある被害についての見聞も、Nの目を通してのこととして描かれている。

冒頭の墓参りの部分と照応するように、意図的に再構成されたと考えられる。

一読しただけでは、中途半端な終わり方をしているように感じられるが、よく読んでみると、作者の筆は見事で、「ノート」の話題を精選して整理し、Nの姿を描いて完璧である。この部分だけを独立させることもできるほど完全な構成になっている。

妻の姿を求めて、女学校の焼跡に茫然と立ち尽しているNの姿には、原爆被災者の肉親を求める多くの人々の姿が重なり、さらに冒頭の、妻の墓に黙礼する「私」の姿が重なるのである。

以上の考察からすると、小説「夏の花」の構成は、記録「原爆被災時のノート」の、時間的・空間的順序に従って事実を書き綴った構成そのままではなく、さまざまの文学的効果をねらって、再構成されていることがわかる。

三

次に、表現面にみられる虚構性について考えてみる。

㈠　人物の一般化

「ノート」においては固有名詞で示されていた人物が一般化され、続柄を示すことばや、頭文字、特徴を示すことばなどで代用されている。

これは当然のことながら、特定の一族におけるできごとという印象を取り除き、どの家庭においても起こりえたこととして広がりを持ち、一般化、普遍化する効果をねらっている。

また、身内の現存者への迷惑を考えて、実名を避けたということもあろうと思われる。

具体例を示すと、次の通りである。

＜ノート＞	＜夏の花＞
○恭子	○妹

○達野　○シャツ一枚の男
○江崎　○K
○柳町のネエヤ　○次兄の家の女中
原田好子
○桜　○赤ん坊
○華　○長女
○呉の人　○旅装のまま遭難した婦人
(邦彦)　○中学生の甥
○今本　○N

㈡　呼応表現

一つは、序の墓参りの部分における、「黙礼を済ますと私はかたはらの井戸で水を呑んだ」という表現とそれ以後の水に関する表現との呼応である。

構成のところでもふれたが、作者は線香や井戸水を伏線として使っているように思われる。

すなわち、被災後の場面は、京橋川が中心となっている。被災者は水を求め、火を逃れて、この川沿いに集まってくるのである。

そして、人を見れば誰彼となく、「水を少し飲ませて下さい」とか「水をくれ、水をくれ」とか、うめいたり、訴えたりしている。

ある重傷兵は、「思いきり川の水を呑み耽って」おり、水道がちょろちょろ出ている空地には、人が集まっている。

暑さのため、「私」ののどの渇きをいやした、序の部分の井戸の水と、被災者が悲願として求め続けた水との呼応を重要な呼応表現であると考える。

もう一つは、序の部分と結びのNの話の部分との呼応であるが、これについては構成のところでふれたので省略する。

㈢　回想表現

構成のところでも述べたが、追加された回想部分の表現、Ⅱの8「大きな楓」の部分とⅣの10「幼時の思い出」の部分には、特に作者の文学的な表現意識が強く働いている。

「大きな楓」の部分については、「ノート」を見ると、「倒レタ楓ノトコロヨリ家屋ヲ踏越エテ泉邸ノ方ヘ向ヒ」とあるだけである。

それが、小説では次のように描かれる。

「私は最後に、ポックリ折れ曲った楓の側を踏越えて出て行った。

その大きな楓は昔から庭の隅にあって、私の少年時代、夢想の対象となってゐた樹木である。それが、この春久振りに郷里の家に帰って暮すやうになってからは、どうも、もう昔のやうな潤ひのある姿が、この樹木からさへ汲みとれないのを、つくづく私は奇異に思ってゐた。不思議なのは、この郷里全体が、やわらかい自然の調子を喪って、何か残酷な無機物の集合のやうに感じられることであった。私は庭に面した座敷に這入って行くたびに、『アッシャ家の崩壊』という言葉がひとりでに浮んでゐた。」

この部分において、作者は一時文章の流れを止め、事件の発端を述べるⅡの結びとしてふさわしくまとめている。

少年時代の夢想の対象が喪失してしまったこと、少年時代と現実との対比によって、現実の残酷さが一層認識されること、楓や郷里全体に異常な感じがあり、妄想が事実となると「アッシャ家の崩

壊」という小説名が浮かぶことから、異常事態が予感されていたことが述べられている。

前述したように、被爆という異常事態を、予感されていた必然的なものとして感じさせるとともに、文章の流れを一時止めて、事件の展開を止め、読者の興味関心を盛りあげて次に進めるという効果も果している。

次に、「幼時の思い出」の部分については、「ノート」に「水ヲクレ　水ヲト火傷ノ男　夜モスガラ河原ニテワメクアリ　オ母サンオネエサン　ミッチャン　ト身内ノ名ヲヨブ」とあり、小説では、次のように描かれている。

「河原の方では、誰か余程元気な若者らしいものの、断末魔のうめき声がする。その声は八方に木霊し、走り廻ってゐる。『水を、水を、水を下さい、……ああ、……お母さん、……姉さん、……光ちゃん』と声は全身全霊を引裂くように迸り、『ウウ、ウウ』と苦痛に追いまくられる喘ぎが弱々しくそれに絡んでゐる。――幼い日、私はこの堤を通って、その河原に魚を獲りに来たことがある。その暑い日の一日の記憶は不思議にはっきりと残ってゐる。砂原にはライオン歯磨の大きな立看板があり、鉄橋の方を時々、汽車が轟と通って行った。夢のやうに平和な景色があったものだ。」

「幼い日」以下の追加の部分は、文脈からしても、「その河原に魚を獲りに来たことがある」という叙述からしても、その場面にいる「私」の視点で書かれていると考えられる。

この部分も、被爆当日の様子を描くⅣの結びにふさわしくまとめられている。

若者の断末魔のうめき声に象徴的に示されている現実の地獄絵巻と、幼時の夢のように平和な景色とが重なっている。

現実の悲惨さを一層強調するとともに、「死期迫る被災者の脳裏によみがえる理想境としての、なつかしい過去の一情景を想像させる働きをしている。

四　特殊な表現

人類が過去に経験したことのないできごとを言葉で表現するのであるから、今までにみられない特別の比喩表現などが用いられている。

虚構性を示す表現の中に加えるのには、いくらか疑問も残るが、未知の現象を表現するために、新しい表現を創造するということも、広い意味で、フィクションに含めて考えてみたい。

まず、原爆が投下された瞬間を描いた部分である。

「私」は、次のようにとらえている。

「突然、私の頭上に一撃が加えられ、眼の前に暗闇がすべり墜ちた」「嵐のようなものの墜落する音のほかは真暗でなにもわからない」

「暗闇がすべり墜ちた」「嵐のようなものの墜落する」などの特殊な比喩表現が用いられている。

また、「それはひどく厭な夢のなかの出来事に似ていた」「今度は惨劇の舞台の中に立ってゐるやうな気持であった。たしか、こういふ光景は映画などで見たことがある」という表現には創作意識を強く感じる。

そして、その部分の叙述は、まず原爆落下時の事実を述べ、次に

くり返して、そのときの自分の意識を述べるという表現上の工夫がなされている。

次は、竜巻を描いた部分の表現である。

「私はこの時、あたりの空気がどんな色彩であったか、はっきり覚えてはゐない。が、恐らく、ひどく陰惨な、地獄絵巻の緑の微光につつまれてゐたのではないかとおもへるのである。」

この「ひどく陰惨な、地獄絵巻の緑の微光につつまれて」という表現も特殊な比喩表現である。

次は、焼跡の様子を述べた部分の表現である。

特徴的なものを抜いてみると、「ギラギラと炎天の下に横たわってゐる銀色の虚無のひろがり」「精密巧緻な方法で実現された新地獄」「人間的なものは抹殺され、たとへば屍体の表情にしたところで、何か模型的な機械的なものに置換へられ」「苦悶の一瞬足掻いて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでゐる」「虚無の中に痙攣的の図案が感じられる」「超現実派の画の世界ではないかと思へる」「この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方が応はしい」などがある。

市街地の焼跡の無生物的、幾何学的、虚無的な感じが新しいことばで表現されている。

最後は、朔の文彦との出会いを述べた部分である。

この部分の内容は、ほとんど「ノート」の通りであって、文体も事実だけを淡々と重ねていく「ノート」の文体を生かそうとしているかにみえる。

しかし、簡潔に記してある「ノート」でさえ、「女ノ身悶エシママ固クナレル姿ハアハレニモ珍シ」と感情を示す表現を入れているのに、小説のこの部分には、なぜ感情を表わす表現をまったく用いなかったのか。

しかも、さがし求めていた末の息子の、変わり果てた姿を見て、嫂は冷静でいられたであろうはずもない場面においてである。

ここには、作者の表現上の計算があると思われる。

すなわち、あたりの悲惨醜怪さを嫌というほど見てきて、無感動、無感覚になっており、さらに疲労と空腹のために弱りきっていることを表現しようとしたのであろう。

また、感情表現を用いないことによって、かえって、「涙も乾きはてた」悲惨な出会いの極限を表現しようとしたのでもあろう。

この一行が人間的な感情、感覚をとりもどしてくるのは、郊外に出て、「青田の上をすいすいと蜻蛉の群が飛んでゆくのが目に泌みた」頃からであろうか。

(五) 批判的な表現

「ノート」に、次のような叙述がある。

「学徒モ　日ナタニ死ニタリ　念仏ノ声モキコユ　シカルニ何ゾヤ　練兵場ニハラッパヲ吹クアリ」

それを小説では次のように描いている。

「空襲警報が出て、爆音もきこえる。」「疲労と空腹はだんだん激しくなって行った。」「次兄の家の長男と末の息子は――どうなってゐるかわからないのであった。」「人はつぎつぎに死んで行き、死骸はそのまま放ってある。救ひのない気持で、人はそわそわ歩いてゐる。それなのに、練兵場の方では、いま自棄に喇叭として

喇叭が吹奏されてゐた。」

こういう悲惨な状況下にあって、なおかつラッパを吹く者、吹かす者に対する憤りが、「シカルニ何ゾヤ」「それなのに」「自棄に嘲嘸として」という表現に込められている。

作者の批判的な精神は、小説の根底に貫かれていて、小説では、さらに次のような叙述もある。

（一人の兵士に肩をかしている場面で）

「苦しげに、彼はよろよろと砂の上を進んでゐたが、ふと、『死んだ方がましさ』と吐き棄てるように呟いた。私も暗然として肯き、言葉は出なかった。愚劣なものに対する、やりきれない憤りが、この時我々を無言で結びつけてゐるやうであった。」

以上のことから判断すると、「ノート」にもみられる批判的な精神は、この小説を構想するとき、もっと明確なかたちで根底を貫いていたのではないかと考えられるのである。

いわゆる自己の使命感について述べている部分の最後は、

「このことを書きのこさねばならない、と、私は心に呟いた。けれども、その時はまだ、私はこの空襲の真相を殆ど知ってはいなかったのである。」となっている。

ここには、時間を異にした二人の「私」がいる。一人は被爆当日の「私」であり、もう一人は「けれども、その時はまだ〜知ってはいなかったのである」と言っている、後の「私」である。（この小説を書いている時の作者と言った方がわかりやすいかもしれない。）

後の「私」（すなわち作者）にとって、「このことを書きのこすとは、被爆の実態を、「空襲の真相」を、今書き綴りつつある、この小説に書きのこすことを意味している。人間のしたこの悲惨極りない事実を、小説に形象化し、「天ノ命」にこたえようとしている「私」に、なにより作者の根元的な批判精神をみることができる。

以上の考察から、表現面についても、ことばを選び抜き、文学的効果をねらって、さまざまな工夫がなされていることがわかる。

ここで特に補足しておきたいのは、「夏の花」には、「ノート」に記されている、にぎり飯等を食べる記述も、「フン尿、蝿不潔カギリナシ」から想像される異臭、悪臭の記述も、ほとんどみられないということである。「死臭に満ちてゐる」とあっても、それほど具体的でない。

これは、「私」を視点人物として、主要にカメラの役割を担わせ、「コノ悲惨ナル景色ヲ念頭ニオクトキ梅の酸胸ニツカヘテムカツキサウニナル」という「ムカツキ」を、「私」の中に意図的に封じ込めたからではなかろうか。

隣の人々が次々と息をひきとるなかで、自分たちはオートミイルを作って、「ウマシト一同讃ズ」とか、死臭、「フン尿、蝿不潔カギリ」なくて、「ムカツキサウニナル」とかという表現がなされていたら、別の小説になったのではあるまいか。

記録とすれば、きれいすぎる、実際はもっとひどい有様だったと体験者が感想をもらすことがある。

それは、作者が原爆被災者の運命と言うか、原爆に遭った人のあわれと言うか、それを描くことに重点を置いて、「ノート」には描

かれている「ムカツキ」を、じっととどめて、書かなかったからではないかと思う。

四

以上、「夏の花」が単なる記録ではなく、作者の創作意識によって、文学的に再構成されているということを、構成面、表現面における虚構性という視点から考察してきた。

原民喜は、「遥かな旅」という作品の中で、次のように書いている。

「もし妻と死別れたら、一年間だけ生き残らう、悲しい美しい一冊の詩集を書き残すために……」

しかし、彼は悲しい残酷な小説を書かなければならなかった。

その「夏の花」について、竹西寛子氏は、「被爆地広島を記録したというさまざまの映像に関しては、見る意志も欲望ももたない私が、『夏の花』だけは繰り返し読むのは、いや読まされるのは、言葉本来の性質やはたらきを別にしては考えられないことだと思う。（「広島が言わせる言葉」）と述べているが、この作品の、ことばの確かさと文学的虚構性とをつけ加えることができるのではないかと思うのである。

（初稿　43・12・1）
（補稿　55・1・31）

（注）テキストは青土社版「定本原民喜全集Ⅰ」

（一九七八・八・一）によった。

（広島県教育委員会指導主事）